

平成22年度 学校経営報告（全日制）

東京都立日比谷高等学校長
石坂 康倫

1 今年度の取組と自己評価

*評価の方法

- ①学校運営連絡協議会による評価(生徒・保護者・教職員)
- ②全教員に対する生徒による授業評価

(1) 教育活動への取組と自己評価

取 組	自 己 評 価
<p>①進学重視の教育課程の編成と実施 国公立大学に合格するための学習到達度を各教科で点検・改善したシラバスを入学当初に生徒に配布し、生徒と教員の学習に対する達成協約とした。また、シラバスに基づく生徒による授業評価を7・12月に行い、授業改善に取り組むとともにシラバスの再改訂を行った。特に2学年の「総合的な学習の時間」では、キャリア教育の一環として、各界の第一線で活躍する19人の先輩を招いての「星陵セミナー～ようこそ先輩～」を実施し、将来の進路を見通した高い志望の大学選択の実現に繋がった。</p>	<p>①シラバスに基づく生徒による授業評価結果から各教科で協議・研修して授業改善を進めた。また、授業評価の結果を踏まえてシラバスを再検討し、生徒がより活用しやすいシラバス改訂へと繋げることができた。シラバスに関する評価は全体的に向上しつつあり、特に保護者・教職員では不満点を挙げる者が前年度に比べて減少した。シラバスに基づく授業の充実は、進学実績を一層向上させるものと期待できる。 なお「星陵セミナー」は、これまで2学年末における進学と将来の進路への強い動機付けとなってきたが、今年度は東日本大震災の影響で中止せざるを得なかった。</p>
<p>②学習と行事・部活動との両立 学習と学校行事・部活動との両立を図るため、行事の実施時期や部活動の活動日の制限等を昨年に引き続き実施した。また、進学校としての生活規律及び心の健康問題に対応するため、生活指導部と保健部との連絡を密にする校内体制の確立をめざした。</p>	<p>②行事に関しては保護者・教職員の80%が教育効果が高いと評価している。また学習と学校行事・部活動の両立も保護者の約7割、生徒の約6割が両立できていると考えている。この割合は前年度とほぼ同水準であるが、年々、生徒の学習意欲が高まる中、進学校の生活指導体制を整えるために、はじめをつけた時間の有効活用へ向けた意識の育成に、今後とも力を入れて取り組みたい。</p>
<p>③進学指導マネジメントシステムの構築 目標管理型の進路指導体制づくりのために、入試、校内実力テスト、校外模試等の定期的・経年比較及び他県有数の進学校とのデータ比較を活用し、3年間の学力伸長度を測る進学指導検討会（定点観測）を、4月、10月の年2回行った。また、その時に出てきた各教科の課題を整理し、まとまったプリントをもとに校内研修を行った。</p>	<p>③各学年ともに生徒全身体制で意欲的に外部模試に取り組み、進学指導検討会の検討結果を踏まえた進路指導部と学年との協力による進路指導の効果が出てきている。難関国立大学及び国公立医学部医学科の現役合格者数が、76名（内現役49名）となり、現役合格者は前年度より3名増加した。難関3私立大学の合格者数こそ、難関国立大学に目標を絞って受験する生徒が増えたため、292名（内現役186名）に止まったものの、国公立大学の合格者数は166名（内現役105名）と前年度を上回った。</p>
<p>④計画的・組織的な広報募集活動の一層の充実 延べ10日間に及ぶ学校見学会・学校説明会、入学相談会等の実施、学校案内の作成・配布、ホームページの適宜改訂等を通して、より丁寧で新しい情報を提供した。</p>	<p>④体育館の改築・改修工事という不利な条件の下、教務部による入試情報提供と総務部を中心にした都内広域に向けての説明会やホームページ・学校案内作成、授業公開等の実施により、中学生や保護者、広く都民に本校の教育活動を紹介することができ、昨年度に引き続き高い応募倍率を確保することができた。</p>

(2) 重点目標への取組と自己評価

取 組	自 己 評 価
<p>①教育課程の管理と学校運営 各教科3年間の学習到達度を設定したシラバスを入学当初に全新生徒に配布し、生徒と教員の達成協約として生徒に提示するとともに、生徒による授業評価を踏まえて、授業改善に役立てた。</p>	<p>①シラバスの配布と説明を通して、3年間の学習の見通しをもたせることができた。さらに、生徒と教師の達成協約として提示したことにより、生徒による授業評価等も生かして、毎年度改訂がなされ、全ての教科で授業改善への意欲が高まってきている。</p>
<p>②学習指導 スーパーサイエンスハイスクール（SSH）の指定</p>	<p>②SSH事業を年間を通して計画的に推進することができ、物事や現象の本質を探究する姿勢を培うように</p>

<p>4年目にあたり、SSH事業の中心に位置づけたハワイ島海外派遣研修を実施する過程において、生徒にいわゆる本物の学問を味わわせ、特に理数教科においては教科のおもしろさを指導することを通して学力の向上をめざした。また、生徒による授業評価、シラバスの改訂、教科研修を関連させて学力の向上をめざした。</p>	<p>努めた結果、進学校としての授業のあり方を共通認識することができた。特に、科学オリンピック国内選考会・コンテスト等で4年連続入賞・受賞するなど、多くの教員も学校が変わったと実感している。今後はさらに、生徒による授業評価結果を生かし、教科・科目の授業改善策を生徒に提示し、授業改善を進めたい。</p>
<p>③進路指導 全国の進学校との比較ができる外部模試を積極的に導入し、進学指導検討会によって学力把握の一層の充実に取り組んだ。さらに、生徒一人一人の高い進学志望を実現するために、100講座以上の夏期講習を5月中に生徒に提示し実施した。</p>	<p>③国公立大学進学希望が高く、国公立大学現役合格者数は105名（昨年度102名）であった。なお、難関国立大学現役合格者は昨年度と同数の39名であったが、医学部医学科を含めた現役合格者は49名（昨年度41名）であった。</p>
<p>④生活指導 朝のあいさつ指導を中心に、生徒に対しあいさつの励行と、けじめのある生活規律の確立に努めた。また、進学校としてのマナーを心得た態度や行動がとれるよう集会等を活用して生活指導を徹底した。</p>	<p>④学校評価アンケートによる生徒の学校生活満足度は前年度よりさらに上昇し、90%近くに達している。保護者の満足度は95%以上にまで達している。自主・自律を尊重しつつも教員が適切に声かけを行い生活指導を進めた。</p>
<p>⑤保健指導 朝の健康観察を継続的に実施するとともに、生活習慣や健康問題等について、学年や生活指導部と連携して健康相談活動を充実させた。</p>	<p>⑤生徒・保護者ともに前年度よりやや評価が上がり、生徒の70%以上、保護者の80%程度は、担任などの教職員と相談できる機会に恵まれていると考えている。</p>
<p>⑥特別活動 学校生活の満足度を高め、自主性・自律性を高めるために、学級タイム（HR）や学校行事、委員会活動、部活動の充実を図った。</p>	<p>⑥行事の準備期間は短く設定し、部活動においても講習や学校行事との両立のために創意工夫し、集中して学校行事の準備や諸活動を行うよう指導した結果、満足できる学校行事を成し遂げるとともに、次に上げるような部活動の成果を残すことができた。 水泳部、関東大会女子200mバタフライ5位、女子800m自由4位、全国総合体育大会女子200mバタフライ出場。陸上部、全国総合体育大会東京予選男子混成競技4位、南関東大会男子混成競技5位、全国女子駅伝都市対抗東京予選3位。硬式テニス部、東京都立高等学校テニス選手権大会男子ダブルス5回戦進出、女子シングルスベスト16。ESS、東京都高等学校英語コンテスト、スピーチコンテスト第1部（一般生徒対象）第2位、第2部（帰国生徒対象）第1位。生物研究会、第54回日本学生科学賞都大会最優秀賞。</p>
<p>⑦研究・研修 進学対策のための授業力向上研修、指名制による授業研究に参加した。さらに、校内の教員間で互いに授業を見合うことで授業力向上に努めた。</p>	<p>⑦進学対策のための授業力向上研修や指名制による授業研究に参加して成果を教科で共有した。教員相互に授業を見合う取組は、前年度から導入した試みであり、今回も大いに研修の成果が上がった。</p>
<p>⑧広報・募集活動 延べ10日間の学校見学・説明会や入学相談会を実施するとともに、2週間の授業公開を通して、本校の教育活動の周知を図った。</p>	<p>⑧学校見学・説明会には前年度を300人以上上回る4752名を集めることができた。これにより入学者選抜では、推薦選抜応募倍率3.84倍、学力選抜応募倍率2.81倍と、今回も高い応募倍率を確保できた。</p>
<p>⑨施設・設備 施設検討委員会及び関係教職員とのヒアリングを定期的に行い、体育館増改修及び本校舎大規模改修工</p>	<p>⑨施設整備委員会を定期的に行い、基本設計及び実施設計に基づき、円滑かつ安全に工事が進むよう、東京都教育委員会及び設計業者・工事業者との連</p>

事に向けた部屋の配置案の作成を行った。	携を密にとった。予定通り平成23年1月に着工した。
⑩予算 最小の経費をもって、最大の効果を上げるため、自律経営推進予算の有効活用に取り組んだ。	⑩進学対策事業や主要教科への予算の重点配分及び効率の執行、物品の有効活用を図ることができた。次年度も継続して、進学対策事業や主要教科へ予算を重点配分していく。

2 次年度以降の課題と対応策

課題	対応策
①自主・自律の精神を涵養し、学問のおもしろさや楽しさを味わわせ、物事や現象の本質を探究する姿勢を培う。特に、スーパーサイエンスハイスクール（SSH）事業計画の精度を高め、理数系教科・科目のおもしろさを伝えることを通して、さらなる学問への興味関心と学力の向上を図る。	①学問の本質を見極める力を培う授業の創造と進学重視の教育課程の推進 <ul style="list-style-type: none"> ・SSH推進委員会を平成23年度よりSSH事業推進部として校務分掌に位置づけることで、SSH事業をこれまでよりも、さらに計画的に推進する。 ・各教科において、学問を修める楽しさを追求し、知的好奇心を目覚めさせる授業に向けた校内研修を実施する。 ・文系の生徒に対しても学問の本質に触れる取組を具体化するよう検討する。次年度も、日本アスペン研究所が主催するジュニアセミナーに参加させることで、考える力と表現する力を育成する。
②難関大学合格実績及び数値目標を安定的に向上させることを重視する。特に、難関国立大学現役合格者数の維持と医学部医学科の現役合格者数を増加させる。	②3年間を見通した進学指導マネジメントシステムの改良 <ul style="list-style-type: none"> ・年1回の校内実力テストや年3回の外部模試結果を丁寧に分析し、年2回の進学指導検討会や校内研修の結果をこれまで以上に生徒への学習指導に生かす。 ・進路指導部、各学年及び各教科の連携により、毎日の授業を充実させ、高い水準の中であっても生徒一人一人の教科・科目の習熟度にバラツキが少なくなる工夫を行う。
③進学実績が上がり、都民からの期待が一層高まる中、人としてのマナーを心得た行動を自然にすることができ、明るく、すがすがしく、生き生きした生徒の人格と品性を涵養するよう、教科指導・部活動・学校行事等を通して、はじめのある学習規律・生活規律の確立を図る。	③学習と生活指導・保健指導及び部活動・学校行事との両立 <ul style="list-style-type: none"> ・学年集会、始業式や終業式等の機会を捉え、進学校としてふさわしい生活態度の確立を目指す。また、心の健康課題に学校として対応できるよう、主任層の連携を強化する。 ・生徒会活動の一環である部活動の部長会を活用し、年間を見通した部活動指導計画の作成・点検・改善を行う。 ・学校行事の指導体制の点検と改善を行う。
④経営企画室と一体となった学校運営を一層推進する。	④経営企画室との連携による学校運営 <ul style="list-style-type: none"> ・企画調整会議や主幹会議の活用及び経営企画室職員の校務分掌への参画により、経営企画室と主幹教諭・主任教諭・主任養護教諭・教諭等が課題を共有化し、組織的な学校運営を一層推進する。 ・経営企画室の参画による組織的な広報募集活動を一層推進する。